

ヒロイン
冴えない彼女の育てかた2

丸戸史明



ファンタジア文庫

1968

目次

プロローグ

第一章 可能性を生み出しただけでアウトなんだよ

第二章 お見舞^{みま}いって、個別ルートのイベントだよな？

第三章 あ、でも鉢^{はち}合わせイベントが起こるならまだ共通ルートか

第四章 うまく言えないけどさ、なんか違^{ちが}うんだよねー #殺意^{せつい}が湧^わいた白詞^{せりふ}

第五章 ラス前の章は上げて落とすのが基本ですから

第六章 楽よね、回想シーン

エピローグその一 または、第五・五章

エピローグその二

あとがき

参考資料

プロローグ

放課後の視聴覚室に差し込む夕陽が、春先よりもずっと高くなった六月 中旬……

「何言ってるの倫也、今月末までにキャラデザなんて無理、絶対無理！」

……なんだけど、そんな季節の移り変わりなんてお構いなしとばかりの甲高い怒声はもはや様式美。

「ラ、ラフでもいいから！」

「ラフどころか棒人間でも無理。だって来週末のイベント新刊、まだ一ページも描いてないし」

「そんな情けない事情をバラすのにそんな思いっきり胸張られてもサイズは増えないと思うんだがどうよ？」

「あ、さらにモチベーション落ちた。これは永遠に完成しないフラグ？」

人の目の前で、自分を威圧的に見せようとオーバーに振る舞っていても、その各所のサイズの小ささが邪魔をして単にちよこまかせわしなく動いているようにしか見えない。

まあ、そんな欠点を差し引いても、明るめの夕陽にキラキラ反射しながらふわりと揺れ

る金色の髪は、この情けない状況に置かれた俺みたいな奴じゃなければ、はっとするくらい美しく見えるんだろう。

それがこの、見た目だけは完璧な擬態学園アイドル。

画家に見せかけたエロ同人作家。

暴虐の金髪ツインテール。

歴史の闇に封印された幼なじみ属性。

澤村・スパンサー・英梨々。

「仕方ない、じゃあ苦渋の決断だが七月中ってことで」

「そんな夏コミの新作が佳境に入ってる時期に何お花畑みたいなこと言ってるのよ？」

「お前、期末試験は視野に入れてるか？」

「……夏コミが終わったらすぐコミトレだし。折り本とはいえ新刊の予定だし」

「なぜ目をそらす」

「しかも一〇月はサンクリで、それが終わったらいよいよ冬コミの準備だもの。この調子じゃ今年いっぱいはどうにもならないわね」

「お前それ去年とまったく同じスケジュールじゃねえか！」

「心配しないで！ きつと来年もまったく同じだから！」

「その優先度の低いオフアーに対しての『いつか機会がありましたら〜』みたいなまるっきり脈なしな言い方やめろっての！」

その、アニメやコミックだと萌えポイントとされるかもしれないけど、リアルでやられたらムカつくことこの上ない傍若無人ぶりは今日も健在だった。

と、その時……

「まったく、そんなこと言ったら何も始まらないでしょ澤村さん」

「っ……」

「う、詩羽先輩……！」

そんな英国女王クイーンエリリザベス（小学生時代に俺が付けた一七のあだ名のうちの一つ）に静かな声で、けれど忌憚なく意見する冷静沉着な大和撫子がここに一人。

「まあ私も、プロット提出期限が今月というのはまったくもって承服しかねるけど」

「せ、先輩……」

いや、大和撫子ってのはその艶やかな黒髪に対しての比喻表現っただけで、その清楚な見た目とはかけ離れた慈悲のなさで容赦なく俺を絶望に突き落とすのも様式美。

それがこの、周囲（主に俺）を巻き込んで自爆する文系テロリスト。

孤高の秀才に見せかけたラブコメ系ラノベ作家。

毒舌の黒髪ロング。

間違いだらけの元カノ属性。

霞ヶ丘詩羽。

私立豊ヶ崎学園の二柱の女神とも呼ばれる二人がこうして目の前に並ぶと、様々なコン

トラストが白日の下にさらけ出され、同じ美の表現でもこれほどまでに方向性が違うのかと感嘆のため息をつかざるを得ない。

一つは極限まで突き詰めた無駄のないシャープなフォルム。

一つは圧倒的なポリウムではちきれんばかりの豊かな曲線。

……まあ、そうやって二人を絶賛したところで『誰が貧乳よ!?』『デブって言った今?』などと双頭の蛇を藪から呼び出すことになりかねないので黙ってるけど。

「実は今、ちょうど新作の執筆に取りかかっているよ。何しろ新シリーズの立ち上げだから全力で取り組まないと」

「そりゃ凄え! ……って、こっちとしては残念だけど、でも新作楽しみにしてます!」

「ありがと……また読んだら感想聞かせてね」

「もちろん!」

しかしこの人、ちょっととはにかんだように微笑むと、はっとするほど天使なのに……

「で、七月は雑誌書き下ろしの短編があるのよ。一応、巻頭ページの特集ももらえたし」

「マジ? それも楽しみだなあ!」

「そして、新シリーズなんだから当然最初のうちは間を置かずには続き出さないとね。というわけで八月はもう二巻のプロット作業に入る必要が……」

「ぞ、続編がそんなに早く読めるなんてラッキー……」

「となると九月に二巻を書いて、一〇月にふたたび雑誌書き下ろしの短編……実は最初からコミカライズも決まってる年明けから連載開始だから年末は打ち合わせが大変で」

「誰にもどこにも隙間ないじゃん! どうやってゲーム作るのこのサークル!?」

なのに、その天使っぽさが続かないというか、ナチュラルに『上げて落とす』テクニクを身につけている厄介な悪魔……

そんなこんなで、つい先日『伝説のギャルゲーの伝説……じゃなくて伝説のギャルゲーを作ろうぜ!』という固い誓いとともに手を取り合った四人の前に、いきなり暗雲が立ちこめる。

「あなたが隙間だらけでしょ。一人で勝手にコッコツ作れば?」

「何しろ同人ですものね。たとえ未完成だろうが何年かかろうが正解率が一パーセントだろうが私を殺した責任を取りさえすれば勝ちじゃない?」

「や、約束したよな二人とも？　ちゃんと俺のゲーム制作に協力してくれるって！」
念のためにもう一度言っておくけど、手を取り合ったのは四人。三人じゃなく四人。

この場所に全員集い、誰一人欠けていない、四人。
「確かにやると思ったけど、まだその時期の約束まではしてないでしょ？　そのことをどうか俺も思い出して欲しいわね」

「つまり、私たちがその気になればゲームの完成は一〇年二〇年後ということも可能だろう……ということ」

「なんでネタ合わせだけ完璧なんだよ!?　お前ら普段は仲の悪いお笑いコンビかよ！」

わかりやすいサークル瓦解の法則　その一
メンバーのスケジュールが全然合わない

まずい、このままでは俺たちの栄光の軌跡にいきなり汚点が……

夏コミで制作告知、冬コミで衝撃デビュー、そして大ブレイク。

来年の夏には壁サークル昇格、冬に商業進出、さらに大ヒット。

そうなれば周囲が放っておかず、ノベライズ、コミカライズ、ドラマCD、フィギュア

化等のメディアミックス花盛り。

そして満を持してのアニメ化……そう、アニメ化は重要だ。

勝ち組アニメなら原作は相乗効果で一食食っていけるコンテンツにもなるうが、負ければ原作含めて一気にオワコン化が待っている。

だから、勝つためには時間を掛け、金を掛け、しかし口を出すのはスタッフ集めまで。

一度人を集めてしまえばあとは彼らの能力を信じて任せるだけ。

原作側が中身にまで口を出しすぎると大抵ロクな事にならないんだよな……

「ねえ、倫理君」

「……ともやです」

と、そんな夢いっぱいな俺を現実引き戻したのは、いつもながらの詩羽先輩の失礼な呼びかけだった。

なお、彼女の俺に対するこの蔑称の理由はいずれ話すつもりはない。

「それに、スケジュールよりも先に検討しなくてはならないことがあるんじゃないかしら？」

「え、それって？」

「まあ、これは何にでも付きまとう話だけど、お金よ」

「……金ならもう一生分稼いじやったけど？」

「……あなたの脳内、今どこに行っちゃってるのよ？」

おつといかん、まだ少しだけ現実に戻ってなかつたらしい。

頭の中ではスピニアウト作品を後進に任せ、自分は働かずのんびり稼いで幸せな老後を過ごすイメージまで到達した。

「ま、まあ、当座の金なら先月のバイト代がまだ結構残ってるし」

「やっぱりまだ真剣に考えていないようね？ 私の言ってるのはイベントの参加費とかそんなレベルの話じゃないわよ？」

「……って言うത്？」

「例えばゲームが完成したとするわね？ まあ、そこまでも結構な費用がかかると思うけどそれは置いても、ちゃんと売るならモノを作らなくてはならない」

「そりゃ、まあ……」

「DVDのプレス代、パッケージやマニュアルの製作、印刷費……数十万から一〇〇万のレベルでお金が飛んでいくわね」

「ひゃ、ひゃくまん!？」

「まあ、まかり間違つてヒットして回収できればめでたしめでたしだけど……それまでの

初期投資は馬鹿にならないわよね」

「ひゃ、ひゃくまん……」

わかりやすいサークル瓦解の法則 その二

〃お金が尽きる、もしくは最初から無い〃

「馬鹿馬鹿しい、そんな現実、この馬鹿が認識してはすまないじゃない」

「なんだと？」

と、黒色のシビアな指摘の後に、金色の幼稚な舌鋒が俺に突き刺さる。

英梨々が詩羽先輩を押しつけるように俺の前に進み出て、ふたたび威圧感を示そうと胸を張った。

……だから強調すればするほど隣にいる詩羽先輩との残酷な格差を俺に刻みつけるだけだというのに懲らない奴。

「だいたい倫也みたいな生まれつきの消費型オタに、一からモノを作る企画力も分析力も持続力もあるわけないわよ。こいつの頭の中にあるのは『ぼくのかんがえたさいきょうのギャルゲーが大ヒットしてTVアニメ化されて劇場アニメ化されて最終的には実写映画

化」っていう、見果てぬ夢だけ」

「馬鹿言うな！ その十数年後に完全リメイク劇場アニメで一世を風靡するところまでちゃんと視野に入れてるぞ！」

「余計タチ悪いでしょそれ！」

わかりやすいサークル瓦解の法則 その三
 リーダーが現実見てない〃

「まあ、そんな夢を叶えるためにも先立つものは必要よね？」

「せ、先輩……」

そして、幼稚な煽りを受けてまた黒い囁きが後を継ぐ。

詩羽先輩が英梨々の前にすつと割り込むと、俺の耳元に息が届くくらいに顔を近づける。後ろで英梨々が不満の声を上げかけたけど、完全にボリユームに気圧されて一瞬で視界から消え去った。

「で、どうするの？ 消費者金融にでもお金借りる？ それとも腎臓でも売る？」

「黒いよ黒すぎるよ先輩!？」

そして、幼稚な煽りを受けてまた黒い囁きが後を継ぐ。

「……なんなら、私が融通してあげてもいいんだけど？」

「え、でも……」

「遠慮することなんかないわよ？ 別に持ってないわけじゃないし」

そ、そういえば……

このひとは、高校生の分際で、デビュー作を全五巻累計五〇万部売った人気ラノベ作家なんだった。

つまり、えつと、累計五〇万部ってことは印税が……例えば一冊六〇〇円として作者の取り分が□%として五〇万×六〇〇の□%で……

……………?

「マジでっ!？」

「ま、もちろん無利子ってわけにはいかないけれど？」

俺のリアクションの中途半端なタイムラグにはあえて突っ込まずに、先輩がいつも通り俺のすぐ右隣に回り込む。

「い、いや、けど返せるアテは……」

「別に、お金でなんて言っていないわよ？ 恩を返す方法なんてそれこそいくらでもあるわ

「けだし」

と、詩羽先輩の目が妖しく光る。

そう、それはまるで街金の人か洋館モノアドベンチャーゲームの未亡人かっくらいに。「で、でも腎臓は……」

「そんなのネタに決まってるでしょ。別に大した要求じゃないわよ。多分、思いつきり拍子抜けするレベル」

「ほ、本当に？」

「ええ、だって私の方はそれほどお金に興味ないし」

さすがこの歳で確定申告してる人は言うことが違う……

「じゃ、じゃあ俺、どうすれば……？」

「それはね……」

右耳に、詩羽先輩の熱い吐息がふつとかかる。

そう、それはまるでギャルゲーのお姉さんキャラか女教師キャラかっくらいに。

「私の、ド……」

「やめんかあああああー!!!」

と、その瞬間、清々しいくらいにテンプレなタイミングで、両サイドで結わえられた金



髪が八の字の軌道を描いて俺の両頬を何度も打つ。

自らの背の低さを利用して、ダッキングで俺と詩羽先輩の間に踏み込んできたようだ。なんとという純血のインファイター。いや日英の混血だけだ。

「い、い、いい加減にしなさいよ霞ヶ丘詩羽！」

しかも続く台詞がまたテンプレ丸出し。

「でも、お金は大事よ？ 澤村さんだつてタダ働きはごめんだつて言つてたでしょ？」

「突っ込みどころはそこじゃないし。てゆうかあたしをダシにしないでよ！」

「サークル活動を円滑に進めようという私の配慮をそんなふうになんて言わなくても」

「いつつもそうやって人を小馬鹿にしたような言い方して！」

やっぱりこの二人、舞台を下りたらお互い目も合わせないお笑いコンビだ……

わかりやすいサークル瓦解の法則 その四

◆メンバー同士の仲が悪い◆

「そこまで嫌がるなら、澤村さんが彼に貸してあげればいいじゃない。あなただつて同人の上がりでごっそり稼いでるでしょ？」

「知らないわよそんなの！ 原価も部数も売り上げも全部パパ任せだし」

さすが自分の確定申告まで親にさせてる人は言うことが違う……

いや、あるいは外交特権で隠蔽されてるかも、こいつの資産。

「せっかく彼のピンチを救うチャンスなのに……後悔しても知らないわよ？」

「あたしはあなたみたいに男を奴隷やヒモ扱いする趣味はないの！」

ああ、さつき先輩が言いかけたあれつてそういう……

「男の成功を陰ながら支える女つても昔ながらのロマンがあつていいと思わない？ 今

度の新シリーズに一人そういうヒロインを入れようと思ってるんだけど」

「全然陰に隠れてないし、大体こいつが成功するわけないし、つてそれ以前に男として意識するとかありえないし！」

「私、あなたのそういう見え透いたところ、本当に嫌いじゃないのよ？」

「あたしはあんたのそういう心の底から邪悪なところが本気で嫌いっ！」

わかりやすいサークル瓦解の法則 その五

◆サークル内で多角関係が構築されている……？◆

「……はあ」

数秒後、そこには教室内に取り残されたため息をつく俺の姿が。

ていうか二人とも、俺が介入する隙すら与えずにいがみ合いながら出て行ってしまった。すげえ、一月前から何一つ進展してないぞ、あの二人……

「……はああああ〜」

などと、人の心配のため息をついてる余裕なんか、今の俺にはなかった。

何しろ一月前から何一つ進展してないのは、俺だって同じだ。

運命に導かれるように、彼女と出逢った三月。

大いなる野望に燃え、ゲーム制作を思い立った四月。

様々な紆余曲折を経て、最強のメンバーが揃った五月。

そして、次々と試練が降りかかってきたこの六月……

最初に時間というハードルが目の前に迫り。

それを越える間もなく、予算というハードルがその先に見える。

最後に協調性という、それまでよりも数段高いハードルがそびえ立つ。

どう考えても、もはやこれまでとしか言いようのない状況。

だからもう、諦めてしまえばいい。勇気ある撤退を決断すればいい。

もともと、単なる思いつきから始まった計画だ。

そこに人生や生死を賭けた戦いなんてものは存在しない。

だから、ただ一言、しょうがねえなああって。

けれど……

「ところでさつきから何やってんだ加藤？」

そんな四月の頃と同じ嘆きをいつまでも垂れ流していても仕方ない。

「ん〜とね、サークルの名前考えてたんだけど」

「……サークル名だあ？」

仕方ないから、さつきからこっちの騒動にまるつきり関与せずに、教室の隅でステルス

性能をフルに発揮していた、四人目。へと話しかける。

「うん、立ち上げてから一月経つけど、まだ名前ないよねウチのサークル」

「ああ、うん……そうだね」

いたねそういえば……

こんなところにも、四月の頃から何も変わっていない奴が。

可愛いと綺麗が中途半端に同居した、なぜか注目を浴びない端麗な容姿。

ポリユーム中くらいのいまいち特徴に欠けるボブカット。

英梨々より高く、詩羽先輩より低い背丈。

ついでに、英梨々よりは豊かで、詩羽先輩よりは貧しい……

なんだろう、この目立たなさも立派な様式美……なのかな？

「こんなのどうかかな？ 『倫也の愉快な仲間うち』 って……」

「……ああ、いや、それによく似た名前の有名なサークルあるから」

「そっかあ、駄目かあ」

うん、駄目だよ、その物事の優先順位。

何しろ今がそんな事態じゃないというのは……

まあ、わかってないだろうし、わかってても何も変わらないだろうけどな、こいつは。

わかりやすいサークル瓦解の法則 その六

なぜいるのかわからない役立たずがいる

いやいや、役立たずでも代表の彼女でもない。

それどころか俺にとつての全ての始まり。象徴、シンボル、つまりこのサークルの陛下。

ゲームの、物語の、そして俺のメインヒロイン、加藤恵。

運命に導かれるように、彼女と出逢った三月。

バイト中の俺と、突然の風と、偶然通りかかった加藤がドラマチックな融合を果たし、

俺のギャルゲー脳を目覚めさせた春休み。

大いなる野望に燃え、ゲーム制作を思い立った四月。

実は同じクラスで二週間以上前から再会していたことを知り、偶然と運命つてのはまる

で別物なんだと思いきらされた新学期。

可愛いけれど目立たない、話が弾むのときめかない、何でも許してくれそうだけどそ

んなの俺が許せない……

そんな、いまいちキャラデザが微妙なご当地萌えキャラのような加藤恵という女の子を、

俺の理想のメインヒロインに魔改造しようと決意した。

様々な紆余曲折を経て、最強のメンバーが揃った五月。

加藤のため、俺のため、今まで封印していた、最強にして最狂の人脈を解き放った。

そして召喚されたのは、澤村・スペンサー・英梨々と霞ヶ丘詩羽。

能力も、美貌も、知名度も、そして扱いの難しさも最大級な、私立豊ヶ崎学園の二柱の女神。

「当然のように勧誘は困難を極め、一時は諦めてしまおうかと思つたゴールデンウィークでもそんな彼女たちを、地道な努力でなんとか仲間に取り入れたのは俺じゃなかった。やる気がないと、ただ流されているだけだと決めつけていた加藤がやり遂げた。だから、まだ名前すら決まらない俺たちのサークルは、こうしてここに存在している。

そして、次々と試練が降りかかってきたこの六月……

加藤恵は今日も、サークルのために役立とうと頑張っている。

「あ、そうだ」

「どした？」

「じゃあ、こういうのは？ 『あつかんべソフト4』 って……ほら四人で立ち上げたし」

「……それに似た名前の大手商業メーカーあるから。しかも3まで」

「そうだ頑張れ、我がサークルの象徴よ……」

第一章 可能性を生み出しただけでアウトなんだよ

「ありがとうございましたり、またお越し下さいませ〜」

家の近所の探偵坂を下りきって交差点を左に行き、そこから二〇〇メートルほど国道沿いに行った先となれば、それは結局のところ家の近所。

そんな近場のファミレス『ファミリー』は、かき入れ時であるはずの日曜夜にもかかわらず、いまだに八分の入りだった。

「お客様お願ひですか？ お煙草はお吸いになれますか？ ではこちらへどうぞ。禁煙席四名様お願ひします〜」

何しろこの場所は、どの駅からも中途半端な位置にある上に、敷地が狭いせいで国道沿いにもかかわらず駐車場が確保できないというネックもあり、俺が知っている限り、一年以上もった店がないという出入りの激しい魔のロケーションだったりする。

「シチューハンバーグ、和食セットのお客様……お待たせしました。鉄板熱くなっておりますのでお気をつけください」

まあ、逆にそんな場所にある店だからして、働く側としてみれば、ピーク時でもそれほ

ど忙殺ぼんざつされずに済むて手頃なバイト先として評判がいい。

「オーダー入りまゝす、あとお客様お会計ですのでレジお願いしますーす！」

そして今の俺は、働く側の立場としてこの場にいる。

つまり、さっきから忙いそしそうに喋しゃべっているのは何を隠そうこの俺だ……

「安芸くん、ちょっといいかな？」

「あ、店長、なんですか？」

もちろん、ただ働くだけじゃない。

キッチンにゲーム好きのスタッフがいれば、行ってギャルゲーの奥深さを説き。

フロアに流行のアニメで盛り上がるウェイトレスたちがいれば、行ってその輪に加わり。

テーブルでキャラグッズを広げるお客様がいれば、行ってさり気なく作品名を呟つぶやき。

「君がこの前提案してくれたタイアップの件なんだけども……本部経由で代理店と連絡

取ってもらったんだけど、どうやらOK出そうなんだよ」

「マジっすか！」

……さらに、店長室で企画会議があれば呼ばれてもいないのに参加して、次期放映予定アニメとのコラボイベントを提唱する。

「それで、こういったグッズを用意したらとか、宣伝はどうやっていこうかとか、色々相

談に乗って欲しいんだけど。何しろ私はこういうのに疎とくてね」

「やるやる！ もうどこにでも出向きますから是非やらせてください！」

そういうオタクに、俺はなりたいたい。

……いや、なってるんだけどな既に。

「じゃ、その話は来週から進めるとして……安芸くん、今日はそろそろ上がっていいよ」

「いえ、今日も閉店まで頑張ります」

「って頑張りすぎだよ。昨日も今日も、午前中から休憩きゅうけいも取らずに働きづめでしょ？」

「いいんです、俺には為なさねばならない目標があるから！ そのためには一日一五時間働

かされたり開店二時間前から準備させられたりほとんどどの時間がサービス残業だったりそ

れでいてボランティアに強制参加させられたりしたって構まいません！」

「……言っておくけどウチそんなブラックじゃないから。そもそも君、めっちゃ活いき活いき

働いているじゃないか」

「やだなあ、単なるたとえですよたとえ！」

三十代の、痩やせぎすで小柄こがらで弱腰よわこの店長が少し困った表情で眼鏡に手をやる。

この人、オタクじゃないんだけど同じ眼鏡キャラであるせいか結構気が合う。

「まあ、バイトにもかわからず自主的に色々やってくれるし助かってるよ。けど決して無

理はしないようにね?」

「大丈夫です! 俺この仕事、天職だと思ってますから!」

「は、頼もしいね」

ちなみに新聞配達は深夜アニメが終わったすぐ後にシームレスに働ける天職だ。引越し屋は時給が高い上にも入れていつでも抜けられる天職だ。

レンタルショップは同じ趣味の人間の比率が多い上に、最新の映像にタダで触れられる天職だ。

結論……俺、労働厨。

一月二三日は感謝しつつ働き、五月一日は権利を訴えつつ働く。

そういう自給自足オタクに、俺はならない。

「あ、それじゃ俺戻りますんで、これで」

と、そのときフロアのチャイムが鳴り、新たな客の訪れを告げた。

「じゃあ、来週もよろしくね、安芸くん」

「あざっす!」

店長に深々と頭を下げ、颯爽と店長室を出ると、ふたたび戦場に戻る。

閉店まであと三時間ほど……いや、冬まで気を抜かずに全力で駆け抜けよう!

そして、必ず手に入れるんだ。

DVDのプレス代、パッケージやミニアルバルの製作、印刷費、あとついでに原画とシナリオのギャラも含めた総額ひゃ、ひゃくまんを超える大金を!

「いらつしゃいませ何名様……!?!」

「あれ、安芸くん?」

……と、気合を入れ直した瞬間。

俺のその気持ちを一瞬で凍らせるような場面が、俺の目の前に展開される。

「……に、二名様、お煙草はお吸いに……」

「あ、禁煙で。なに、また新しいバイト?」

何しろ、そこにいたのは……

「あれ? 恵ちゃんの知り合い?」

そう、そこにいたのは恵………こと加藤。

それはまるでどこの漫画かラノベだよというくらいに偶然に彩られたシーンだった。ただ、指指には安心安全の萌えラブコメ系ではなく……

「あ、うん、同級生。安芸倫也くん」

「へ、偶然じゃん。あ、俺、加藤圭けいじち」って言います、よろしく」
「……………ども」

そう、泥沼系どろぬまというか、NTR系というか……

つづきは11月20日発売のファンタジア文庫で！

©2012 Fumiaki Maruto, Kurehito Misaki

